

第3回全国マナーキッズフォーラム 2010
「教育の品川」から発信する—マナーキッズプロジェクトと「市民科」との接点—
報告書要旨

- 1 主催者挨拶
 - 2 ご挨拶 藤原一成 文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課課長補佐
 - 3 キーノート・スピーチ 若月秀夫品川区教育委員会教育長
 - ・ 品川区における教育改革の目的
 - ・ 真の教育改革を目指す
 - ・ 教育の原点は道徳にあり
 - ・ 教育の原理
 - ・ 文科省の古い頭には市民の声が必要
 - 4 ご挨拶 鈴木万亀子総師範
 - 5 パネルディスカッション
 - ◆ 基調スピーチ 和氣正典 品川区教育委員会小中一貫教育担当課長
「品川区独自の教科「市民科」とマナーキッズプロジェクト」
 - I 「市民科」創設の背景
 - ・ 家庭の教育力の低下
 - ・ 子どもにおもねる教師たち
 - II 「市民科」のねらいと構成、授業
 - ・ 道徳教育の現状
 - ・ 小中一貫9年間を通じて社会で生きていく力を身につけさせる
 - III マナーキッズプロジェクトの活用
 - ・ 学年に応じた活用
 - ・ マナーキッズプロジェクトで子どもたちが実践
 - ◆ 基調スピーチ 佐藤 勝 鈴ヶ森小学校校長
「マナーキッズテニス教室を通して学んだこと」
 - ・ 本物のすごさを見分ける子どもたち
 - ・ 挨拶の基本を学ぶ、礼儀、マナーは万国共通
 - ・ 心にしみる鈴木総師範のお話
 - ・ 年配の方の情熱が子どもの心に響く
 - ・ 四つの指導ポイント
 - ・ 子どもたちの変容
 - ・ 今後の課題
 - ◆ 基調スピーチ 田中日出男認定NPO法人マナーキッズプロジェクト理事長
「品川区教育委員会とのコラボレーションの意義」
 - ・ 全国で初めての予算化
 - ・ やればできる中学生
 - ・ 品川区を重点拠点として新たな実験
 - ・ マナーコミュニティ運動
 - ◆ コメンテーター山本浩 法政大学教授 元NHKアナウンサー・解説副委員長
 - ・ カオスが支配する状態
 - ・ 小さな穴を塞ぐ
 - ・ 兵の作り方、アスリートの作り方
 - ・ コミュニケーションのエネルギー
 - ◆ 自由討議
- コーディネーター 永井順國 政策研究大学院大学客員教授
総合司会 宮司正毅 国際協力機構客員専門員

〈主催者開会挨拶〉 田中日出男
品川区が初めての予算化

本日は、文部科学省スポーツ・青少年局藤原課長補佐様、三菱東京UFJ銀行神柳会長様、国際ロータリー2590地区関がバナー補佐様はじめ全国各地より多数ご出席頂きまして誠にありがとうございます。

今回のフォーラムは二つの点で意義深いものと考えております。まず、第一点は、我々がこの運動を始めて、6年目を迎えますが、ようやく曙光、薄明かりが見えてきた感じがいたします。といえますのは今回、全国で初めて予算化をいただきまして、品川区教育委員会と協働して、品川区内幼稚園、小学校そして中学校において、マナーキッズ教室を展開できることを大変うれしく思っております。全国で予算化するの初めてでございます。この輪が広がることを期待しております。

先ほど中学生が小学生を指導するという、全国で初めての試みを行いました。当初の心配をよそに、立派に中学生が小学生に対してマナーの指導をすることができました。中学生に自覚と責任感を持たせれば充分にやれることを確認いたしました。

認定NPO法人に

第2点目は、われわれNPO法人は3月16日から認定NPO法人になりました。この認定NPOを契機に本年4月1日から財団法人日本テニス協会が主催して実施しております「マナーキッズプロジェクト」は、認定NPO法人が主催者として実施するように変更になりました。言い換えれば一本立ちできるかどうかを問われているフォーラムだと考えております。

〈藤原一成文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課課長補佐挨拶〉

品川区の新たな取り組みに注目

みなさんこんにちは。文部科学省(方面)から参りました藤原と申します。決して大臣ではありません。事業を拝見し、このプロジェクトは大変素晴らしい取り組みだと思っております。

私は40歳過ぎてからテニスを始めました、少しもうまくなりませんが、時々感じることは、テニスコートでマナーの悪い大学生などの若者が多いなということです。また、たばこの煙で大人からも嫌な思いをさせられたこともあります。

このプロジェクトはマナーに焦点を当てています。スポーツは本来、道徳心の向上などの教育的機能を持っています。その教育的機能を前面に出した事業をNPO法人が実施されている。現在、政府では「新たな公共」の創造という方針が打ち出されています。このプロジェクトをきちんと予算化している品川区は、まさに「新たな公共」を先取りして実現して

いると思います。

子どもたちのマナーは大人の責任

私は子どもたちがマナーキッズに取り組んでいる姿を見て、格好良く見えました。もし現在の子どもたちにマナーが備わっていないとすれば、それは私たち大人の責任です。我われ大人が子どもたちに日本に古くからあるマナーを伝えてこなかったということです。私たちがその責任をシェアして、それぞれの立場で子どもたちに伝えていくことが大切です。

日本は戦争に負けて日本人としてのプライドがズタズタになってしまったという人もいます。決して私はそんなことはないと思います。今日はおじいちゃんが孫に教えている、そんな光景でした。あるシニアの方が言われました。「今の親がダメなら、おじいさんおばあさんが子どもに教えなければ」。決してそんなことはないと思っています。十分に親御さんたちの世代も伝えることができると思いますし、またできると信じています。

このマナーキッズプロジェクトが発展していきますことを切に祈念し私の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

<キーノート・スピーチ>若月秀夫品川区教育委員会 教育長

品川区における教育改革の目的

品川区が願っていた姿勢にいち早く気づかれたのは、教育界の人間ではなく正に世間の多くの皆さんでした。現在、品川区はお陰さまで学校選択を始めとして小中一貫教育などの教育改革が進められています。この10年間にはいろいろなことがありました。しかし何とか人様から後ろ指を指されることもなく今日までやって来られました。これは世間一般の方がたの正しい理解があったからこそです。

真の教育改革を目指す

今現在、この時点においても抵抗しているのは教師集団です。未だに抵抗を続けています。「品川区は余計なことをしている」「制度をいじって教育は変わるか」「教育改革は教室から」、何とも聞こえのいい言葉です。

「教育改革は教室から」その通りですが、それを言い続けて果たして何年経ったでしょうか。もっと目をそらしてはならないことは、そう言いつつ、今も子どもたちはどういう人間に育っているかという事実を見ないということなのです。「このように立派な社会人になった」と言える事実があれば、「教室から教育改革がなされた」と胸を張ってもいいでしょう。

しかし教師の皆さんが「教育改革は教室から」言われますが、最近の子どもたちの様相や

青少年の姿は一体どうなのでしょう。自分たちの主張とどのように整合性をつけ、自らの責任を発見しようと言う努力や姿勢が、教育の現場にどれほどあるのでしょうか。

このような浮世離れした観念や感覚から、とにかく学校教育の目を覚まさせたい。これが品川区の大きな教育改革の目的の一つです。決して新自由主義というイデオロギーや主義にのっとって何かをつくったのではありません。学校で育つ子どもたちの具体的な事実、教員の日々行っている具体的な事実や教員の言動など、全て事実から出発しました。

教育の原点は道德にあり

品川区は新しく、教科・「市民科」をこしらえました。これは決して道德を軽視しているものではありません。教育というのはどの教科においても道德に収斂されるべきものです。極端な言い方をすれば、教育は正に道德なのです。道德こそ教育の原点なのです。国語、算数、英語など全ての教育の原点は道德なのです。

教育の原理

ところが教員が持っている悪い癖ですが、日本の教育学の歴史を考えると、どうしてもドイツなどの観念論が日本には入ってきました。その影響が強いのか、非常に形而上学的なのです。要するに観念的であり抽象論的であり、心構え論的なのです。それはそれでいいと思います。

しかし今子どもたちが見せる事実から私たちは何を感じるのでしょうか。ここで教育の原理についてしっかりと考える必要があります。

教育にはいくつかの原理があります。その一つに「教育は他律による自律への促し」という原理があります。最終的には自律を目指すのです。すべからく全ての人間がその中で生きています。人の歴史は全てそうでした。

今の現場の教員からは「他律」そのものにアレルギーを起こします。「子どもの持っている可能性を・・・」すでに形而上学的なのです。「子どもの意欲を大事にしよう」「子どもの発想を大事にしよう」「子どもの目線に立って」、これらは否定のしようがありません。

しかしそれに付随する具体的な戦略、方略、手段、方法を聞かれたとき、はたと現場は立ち止まってしまいます。そしてただ単に言葉のやり取りで終わってしまいます。その結果が今の子どもたちの公共心の低下、道德性の低下につながっているのです。

文科省は口で言うだけ

教育における「他律による自律」を考えたとき、マナーキッズの皆さんがやっておられる

テニスならテニスを材料にしてマナーを教える、これはある意味では他律なのです。昔の軍隊のように「こうしろ、ああしろ」ではありません。このような具体的な行動を通して子どもたちにマナーや礼儀を自然な形で伝えていく、こういったものを基本に置かなければ、いくら尊く気高く美しく涙あふれるお話しを子どもたちが教室で聞いても、何のリアリティーもありません。

子どもたちがリアリティーを持ち、聞いた話しを現実の社会に置き換えたときに、具体的にどうするか思いに至らないのです。文科省の立派な調査官は、品川区がやっているものは道德ではない、もっと道德性を高めなければと言うでしょうが、道德性が高まっていない子どもたちがいるにもかかわらず、そこは見ずに道德、道德と訴えるだけの彼等。その結果としての今の子ども姿。

私はそのようなことを言う役人の言うことは聞きません。役人の趣味の領域で作った道德というくだらないものを品川の子どもに与えて、子どもたちをバカにたくはありません。レベルの低い人間にはしたくありません。

文科省の古い頭には市民の声が必要

道德は必要です。それを身につけさせる手段、分かりやすく言えば子どもたちに武器を持たせる、その具体的な行動の仕方をまず教えることが重要なのです。その中から子どもたち自身が自らの道德律を創造していきけるような力をつけることが大切です。

そのために品川区では「市民科」を作りました。道德性を高めるといふ余地も残しておりますが、具体的な行動様式も市民科には入れました。それを一緒にして一つの市民を作ることが市民科の目的です。

そうした意味で本日のマナーキッズプロジェクトは本当に素晴らしいものだと思います。

最後のお願いになりますが、私たち教育関係者がいくら文科省の教科調査官に訴えてもまるでダメです。代々受け継がれた古い頭がそのまま続いているのです。

道德教育には具体的な方法を入れなければダメだということを、皆さんたちから言っただきたいのです。私たちのような同業者の言うことは聞きません。調査官は具体的な事実に基づいてものを語るようなことはできません。ぜひ皆様方のお力をお借りしたいのです。

<鈴木万亀子総師範挨拶>

素直な子どもの心

皆さま今日は誠にありがとうございました。私は今まで小笠原流礼法といたしまして成人、

大人にだけ指導して参りましたが、田中先生とお目にかかることができ、初めて子どもに携わりました。

大人よりも子どもの方が、反応が早いことに気づきました。それだけ新しい心を持っているからだと思います。どんな子どもでも知らないだけで、教えればすぐにインプットすることが分かりました。

小笠原流礼法もその元はスポーツ

最初はなぜ小笠原流礼法とテニスが結びつくのか、その意味がよく分かりませんでした。しかしよく考えて見ますと、小笠原流礼法と申しますのも最初は弓と馬から始まりました。つまり、スポーツでした。それを考えますと、600年700年前の小笠原家の当主が、今ごろ空の上で笑っているのではないかと考えています。「元に戻ったな」と言われているのではないかと思いました。

これからも皆さまのご協力を得まして、このマナーキッズプロジェクトが発展しますことを心よりお祈り申しあげております。

EQの高い人ほど社会で活躍

それとともに、今はIQばかりが叫ばれている世の中ですが、ニューヨークタイムスの発表にもありましたように、EQ、つまり感情指数が高い人ほど世の中で活躍しております。その割合は80%だとも言われています。そのような具体的なデータも出ています。

マナーキッズプロジェクトで相手を思いやる心が少しでもEQアップにつながれば、双方ともに強いものになると思います。今後とも皆さまのご協力をよろしく願いいたします。ありがとうございました。

パネルディスカッション

「教育の品川」から発信する ～マナーキッズプロジェクトと「市民科」との接点～

【コーディネーター】 永井順國

「点から面」の情報交換に

今回で3回目を迎えるフォーラムですが、昨年までの2回とはかなりスタイルや内容を変えたものとなりました。昨年と一昨年は全国各地のさまざまな取り組みを相互に交換しあい、それぞれ参考にしていこうというものでした。全国各地から来ていただいて話をいただき、そこから学ぶというスタイルでした。言い換えれば「点」の情報の交換でした。

今回は品川区というところを拠点にし、いわば「面」としてマナーキッズプロジェクトの

ありようを考えていこうというものです。先ほどの若月教育長のお話にもありました「市民科との接点」をキーワードの一つに据えています。これが今回のフォーラムの特色だと思います。

品川区独自の教科「市民科」とマナーキッズプロジェクト

和氣正典 品川区教育委員会指導課小中一貫教育担当課長

I. 「市民科」創設の背景

社会に不適合を起こす子どもたち

市民科はある種の危機感から生まれました。実際のところ子どもたちは社会で不適合を起こしております。ニートになったり非行に走ったりしています。最近の白書によると、子どもたちの犯罪が低年齢化していると言われています。このことはマスコミでも大変騒がれています。

こんな事態をなぜ招いてしまったのか、なぜそうなってしまったのでしょうか。子どもたちが自らの輝かしい人生を築いていけない、こんな世の中になぜなってしまったのか、教育の立場からの考え方で市民科を作ろうということになりました。

基本的なコミュニケーション能力を持たない子どもたち

今、基本的なコミュニケーション能力を持たない子どもたち、そもそも人間関係を築けず、会話すらも成立せず、何かあると我慢できずにすぐにキレてしまうような子どもたちが増えています。

家庭の教育力の低下

学校は、家庭がしっかりしないから子どもたちがこのようになってしまうといい、家庭は学校が何とかしてくれると思っています。その中で子どもたちは取り残されていきます。

家庭そのものも核家族化が進み、子どもにきちんと関わっていけない。学校の現場にいれば感じるのですが、非常に自分中心主義的な親が増えています。子どもに対する育児についても十分に考えられず、それよりも自分の楽しみを優先してしまうという親たちが増えています。

また自分の子どもを叱れない親も増えています。子どもの言うことを何でも認めてしまいます。親は子どもに迎合し、子どもも親も友だち感覚で付き合ってしまうます。

子どもが嘘をつくのは当たり前の話です。自分の子どもの頃を振り返っても、親にはいろんな嘘をついたと思います。その嘘も含めて親は「子どもが正しい」「教師が嘘をついてい

るのに違いない」という形で、子どもにすぐに迎合してしまいます。子どもが悪いことをした場合、学校が注意しても、親はなぜ自分の子どもだけを注意するのかと文句を言います。子どもはそれを聞くことにより、自分は悪いことをしたとは思わなくなります。

このような状況の中で、子どもたち自身がさまざまな形で自分自身を律し得ない。そのようなことが起きていることに対して、学校は家庭が、家庭は学校がやるべきというような押し付け合いがずっと続いてきました。

子どもにおもねる教師たち

一時期、子ども中心主義がはやりました。これが誤解され拡大解釈されて、何でも子ども中心でいいのだ、子どもの自主性が大事なのだと考えてしまいます。子ども目線に立つということが子どもに迎合することとイコールになってしまいます。

先生も子どもをきちんと叱れないのです。きちんと子どもを指導できない、親と同様に子どもと友だち感覚になってしまいます。これにより子ども自身が何を基軸にすればいいのかわからなくなってしまいます。そのような現実があります。親や大人がきちんと子どもを指導しない。

先ほど教育長も「他律による自律」ということをお話ししましたが、私どももいろんな人生の中で、親に対し大人に対して反発したり同意したりしながら自分自身の価値を形成してきたはずです。大人がきちんとした価値観を指導しなければ、子どもは何を軸にしてもものを考えればいいのかが分からなくなってしまいます。

子どもは未来に向けて新しい価値観を作っていくのですが、そのための基礎となる価値観をきちんと大人が伝えきれていないのです。

子どもの目線に立つということは、子どもにおもねるのではなく、子どもと対等に向かい合い、ある意味では戦っていく過程であると思っています。そうした中でお互いの関係が作られ新しい価値が創造されるのではないのでしょうか。

Ⅱ. 「市民科」のねらいと構成、授業

道徳教育の現状

学校で教えるべき内容をおざなりにしか教えていません。学校の先生方もどうしていいのかわからない。とくに道徳について教科書もなく指導書もありません。熱心な先生は一生懸命にやっていますが、多くの先生方は分からないままに道徳を自分流に実践します。

この会場に来られている皆さんの中で、どれほど道徳の授業を覚えておられるのでしょうか。

それがどれだけ自分の人生の糧になっているのでしょうか。これが道德教育の現状ではないのでしょうか。

小中一貫教育 9年間を通じて社会で生きていく力を身につけさせる

そういった子どもたちに対して、自らのあり方や生き方を自覚して、生きる道筋を見つけていく、我と我々の世界を生きる力をバランスよく身につけさせたいと考えています。私たちは小中一貫教育をやっておりますので、9年間というスパンできちんと積み上げていきたいと考えました。

こうしたことから、一からしっかりと考え直し、道德、特別活動、総合的学習それぞれの目的や関係性を明確にして統合し、新教科としての市民科を立ち上げました。

7つの資質と5領域・15能力

子供たちが社会で生きていくために必要な7つの資質というものがあります。主体性、積極性、適応性、公德性、論理性、実行性、創造性の7つです。それを自己管理、人間関係形成、自治的活動、文化創造、将来設計の5つの領域に分けました。それを支える15の能力をバランスよく子どもたちに見つけさせていきたいと考えております。

Ⅲ. マナーキッズプロジェクトの活用

学年に応じた活用

このような状況の下でマナーキッズプロジェクトに出会い、市民科の授業のひとつとしてマナーキッズ教室を取り入れました。

1・2年生には、自己管理領域のNo.1『気持ちのよい1日あいうえお』、No.2『気持ちのよい言葉や態度』、人間関係形成領域のNo.14『あたたかい気持ち「ありがとう」』、No.15『あいさつは元気のもと』を教えています。

3・4年生には、人間関係形成領域のNo.15『ありがとう～あなたの気持ちを伝えよう』、自治的活動領域のNo.23『心を伝えるマナー』を教えています。

5・6・7年生には、自己管理領域のNo.5『場に応じた行動の仕方』を、8・9年生には自己管理領域のNo.10『社会ルールとマナー』というように、私どもの教科書の単元に合った形でマナーキッズプロジェクトは活用していけると思っています。

マナーキッズプロジェクトで子どもたちが実践

このように私どもは内容的にもしっかりと教えています。実践的にもしくは体験的にいろいろと取り組んでいます。「挨拶する」ことを、マナーキッズプロジェクトを通じて子ど

もたちが実践しています。大きな声で挨拶すると気持ちがいい、きちんとやるとかっこいいということを体感してもらいます。

品川区ではマナーキッズプロジェクトの予算化を図りました。本年度は完全ボランティアでやっていただきましたが、少しばかりは私どもも負担したいと考えております。現在、区内全域の小学校中学校に呼びかけており、希望する学校で積極的に実践していきたいと考えています。

市民科をさらに充実させるための一つの手法として、一緒に協力していければいいなと思っております。

マナーキッズテニス教室を通して学んだこと

佐藤 勝 品川区立鈴ヶ森小学校 校長

本物のすごさを見分ける子どもたち

進め方としては、最初に鈴木総師範により礼法指導を10分間ほど全児童に行っていただきます。その後約20分から30分で、一つの学年だけ鈴木総師範から道徳の講話をしていただきました。

子どもというのは、本物のすごさを本能的に感じるものです。鈴木先生のお話を伺う時は、いつもと子どもたちの雰囲気が違うのです。背筋がきちんと伸びて姿勢よくしっかりと話を聞いていました。

挨拶の基本を学ぶ

10分間の具体的な中味は、「マナーの基本」「自分がされていやなことは絶対に人にしない」「よい姿勢とは」「言葉を述べてから、心を下げる」「残心（ざんしん）」などです。一般的には挨拶するときに「おはようございます」と言いながらお辞儀をしますが、それは間違いだそうです。まず言葉を述べてからお辞儀をすることが大切だそうです。このことを学んでから本校では、まず挨拶してから礼をするようになりました。

もう一つ鈴木総師範のお話の中で心に残ったのは「残心」ということです。礼をした後に心を残す。余韻を大切にすることだと思えます。低学年の子どもたちはどこまで分かっているのか不安はあるのですが、子どもたちはみな真剣に聞いており、まさに心にしみいる様子でした。

礼法、マナーは万国共通

この全体講話の後、6年生は場所を移して道徳の講話を20分受け、3年生はすぐにテニス

指導に移りました。道徳の講話は、1日目は6年生、2日目には4年生にいただきました。「国際社会で生きていくためのマナー」「食事におけるマナー」などについてのお話をさせていただきました。

これまで鈴木先生のお話を伺っていて、礼法とかマナーは万国共通のものだということを感じました。目上の方を敬う気持ち、食事のマナーなどはどの国でも必要なことなのです。そのような大切なお話を講話でいただきました。

心にしみる鈴木総師範のお話

2日目には鈴木先生から親御さんに対しても講話をしていただきました。「躰の基本は家庭にある」との内容ですが、学校では直接親御さんには話しにくいテーマです。とにかく躰の基本は家庭ですよ、ということをつかりやすく具体例を上げながら話をさせていただきました。親御さんからは、とてもいいお話を伺えたとの感想と同時に感謝の言葉が述べられました。自分の子育てを見つめ直すことができたという感想もありました。

本校の場合は新しい年度に入ってから取り組みでしたので、正直申しまして親御さんに集っていただくことに非常に苦労しました。2度3度とご案内のプリントを出しましたが、最終的に集っていただいたのは30人程度でした。できれば全校の親御さんに鈴木先生のお話を聞いていただきたいと思っています。

年配の方の情熱が子どもの心に響く

テニス教室には2日間とも30人ほどのボランティアの方がたにおいでいただきました。朝は7時半から準備をしていただきましたが、中には埼玉県からいらっしゃった方もおられました。本当に一生懸命にやっただき頭が下がる思いでした。

ご年配の方が多く、私にとっては人生の大先輩のような方ばかりです。普段はテニスを初め悠々自適の生活をされているのではないかと推察するのですが、これからのわが国を担う人材を育てるために、自分たちでできることを一生懸命にやろうという熱い思いをひしひしと感じた次第です。

四つの指導ポイント

私が拝見した指導のポイントは4つあると思います。一つは、「挨拶は常に自分からする」ということです。目下のものから挨拶する。二つ目は「相手の目を見て挨拶する」こと、そして三つ目は「できるようになるまで大きな声で自分から何度でもやり直しさせる」ということです。とにかく絶えず挨拶をさせます。四つ目は「常に感謝の気持ちを持つ」というこ

とがポイントだと思います。

子どもたちの変容

マナーキッズテニス教室を行って、間違いなく子どもたちの挨拶は変わりました。第一に自分たちから挨拶をするようになりました。また、繰り返し指導していただいた成果だと思えますが、目を見てきちんと挨拶ができるようになりました。休み時間に遊んでいても、私の姿を見かけると、寄ってきて「校長先生こんにちは」と言ってくれます子どもいます。

これを実践することで子どもたちは間違いなく変わってきます。これは本校の先生方も実感しているところです。

今後の課題

このプログラムはそれぞれの学年で1日だけやりました。実施した直後は確かに変わりましたが、それを一過性のものにしないでどう継続していくかということが非常に大きな課題です。「あの時やったでしょう」と始終子どもに言ってはマイナス効果だと思います。

現在は3ヵ月後とぐらいに振り返りを行っていますが、ただ学校だけでやっても効果は十分ではありません。保護者の方や地域の方との連携を図って、せつかくできるようになったマナーをいかに持続させるかが課題です。

また、田中理事長から「フォロー要綱（案）」を送っていただきました。これは決して押し付けではなく、どのようにフォローすればいいのかという例示です。その中から、マナーキッズテニス教室で学んだ大切なことを、どのように持続させていくかが次年度以降の大きな課題になっています。

品川区教育委員会とのコラボレーションの意義

田中 日出男 認定NPO法人マナーキッズプロジェクト 理事長

全国で初めての予算化

平成17年4月から財団法人日本テニス協会マナーキッズテニスプロジェクトを開始し、約31,000人の幼稚園園児、小学校児童が参加しました。

私たちのNPO法人はスポーツ・文化活動と日本の伝統的な礼法のコラボレーションを特徴にしており、テニス以外のスポーツ他で約11,000人の参加があり、広がりがつつありますが、しかしまだまだ点での展開であり、それをいかに線、面にするかに悩んでおります。たまたま、品川区の上神明小学校において、授業としてマナーキッズテニス教室を開催することが出来ました。そこから和氣課長にご紹介いただき、そのご縁で鈴ヶ森小学校と浜川小学

校で実験的にマナーキッズテニス教室をやってみようということになりました。

先ほど曙光が見えてきたと申しましたが、全国で初めて予算化して頂きました。ぜひ「教育の品川」から発信していただき、それに併せてマナーキッズも点から線、面になることを期待しております。

やればできる中学生

小学生は教えれば必ず変ります。その小学生もやがて中学生になります。私も何度か鈴木総師範とご一緒に中学校に参ります。鈴木先生がお話されます。その現場では驚くようなことがありました。

校長先生が演壇に立っても生徒は座ったままです。話を聞いていない生徒も多い。女子中学生の中には股を開いて座っているものもいました。中学生はある意味ではすでに大人の領域に入っています。彼らにどのようにマナーを教えるのかを考えておりました。

北九州地区では、多くの小学校においてマナーキッズ教室を開催しておりますが、ある小学校で5年生、6年生にマナーキッズ教室を行いました。こちらから何も言わないのに、その5年生、6年生が半年後に1年生、2年生を指導したという話を聞きました。そういうやり方もあるのだということに気がつきました。

たまたま品川区は小中一貫でやっておられますから、マナーキッズ教室のお話をしましたら、八潮学園で中学生が小学生の指導をやってみようということになりました。まず、1月29日に、中学生を対象に鈴木総師範から正しいお辞儀・挨拶の指導をやっていただきました。3月16日にはベテランプレーヤーが指導を行いました。さらに白戸プロに3回、合計5回の指導を行いました。

その結果、本日ご覧になりましたように見事に中学生がきちんと小学生に指導をしました。中学生に自覚と責任感を持たせるとやれるのだということを確認いたしました。是非、同様の試みを他の学校においてもやっていただきたいと思います。

品川区を重点拠点として新たな実験

我々は、平成22、23年度は、品川区を重点拠点として実施し、そこで成功例をつくり全国に発信したいと思っています。子どもは教えれば必ず変りますが、それを持続させることができるかどうかは難しい課題です。

まずは、開催幼稚園、小学校において、校門での挨拶、朝礼での挨拶、授業開始時、終了時の挨拶等において、マナーキッズ教室で習った挨拶の励行、習慣化を是非実践して欲しい。

マナーキッズ原稿 02

マナーコミュニティーという商標をとりましたが、いかにして地域あげてやるか、保護者をどう巻き込むかが重要です。私たちはマナーキッズカレンダーを作り小学生の保護者に配り、実験をしていただきました。

問題もありました。今の親子は文字を書くことに抵抗があるのです。チェック式にしないとダメなのか。しかし小さな頃から「文字を書く」ことをやらないと国語力が落ちる一方です。しかし親が活用してくれなければ意味がありませんので、今後マナーキッズカレンダーをどのようにするか悩んでいます。

地域に変化をもたらす

さきほどマナーコミュニティーということをお申しました。本日はロータリークラブ、青年会議所からも来ていただいておりますが、一つのトライアルとして考えていることがあります。先ほど北九州の遠賀郡岡垣町には小学校が5校あります。全校でマナーキッズ教室を実施しました。全ての学校で実施すると変化が生まれてきました。

町長も、子どもだけにマナーキッズをやってもダメなので、町役場が鈴木総師範から講義を受けたいということになりました。いわゆる公共サービス上でのマナーです。そこで鈴木総師範が外向かれ、全岡崎町役場の皆さんにお話されました。ロータリークラブも協力してくれました。

マナーコミュニティー運動

岡崎町には「マナーコミュニティー運動」というのをお願いしております。スポーツ少年団などありとあらゆる団体に呼びかけて、テニスに限らずいろんなスポーツや音楽の催しで、町をあげてマナーキッズ教室を実施していただく。

これによって1年後、2年後、3年後にどのように変化したかを測定すれば、子どもだけではなく、色んな分野で何らかの変化が出るのではないかと考えております。

地域でのフォロー

人口が3万人や4万人の町だとやりやすいのですが、東京のような巨大な都市では実施が難しいので、品川区の中学校の学区でトライできないかというのが私の願望です。私どもだけで考えても進みませんので、商工会議所や商店街の方がたと一緒にやればよいなと思っています。

マナーキッズ大使に挑戦

本日は、マナーキッズテニス大使の小金井市立本町小学校5年生の一山貴洋君が来ており

ます。本来ならマナーキッズ大使として昨年にウインブルドンに行く予定でしたが、新型インフルエンザの影響で延期になり今年参ります。

マナーキッズテニス大使は、試合結果、マナー、感想文、運動能力、面接で審査します。何故、そういう基準で選んでいるかということ、今のスポーツの世界は勝てばいいとの風潮があります。そうではなく文武両道の大切さ、フェアプレーの精神とかを小さい時から学んでもらいたいと思います。また、いい感想文を書けるためには、小さな頃から本を読む習慣を身につけて欲しいと思っています。品川区の全小学校において、マナーキッズ大使に挑戦して欲しいと思います。

鈴木総師範は、保護者に対して大変いいお話をされるのですが、小学校では、保護者を集めることに大変ご苦労されています。幼稚園なら保護者の出席率が高いですので、品川区の全ての幼稚園でマナーキッズ教室をやり、保護者に、一度は鈴木総師範の話聞かせる。その中の二人でも三人でも変ればいいなと思っているところです。

鈴ヶ森小学校PTA会長 松本吉宏さん

子どもを育てるにはまず親を育てる

マナーキッズの講座を実施した後、マナーキッズカレンダーをやりました。校長先生が言われたように、やった当初は非常に元気よく礼儀正しくやっていましたが、なかなかその後に続かないことが正直な感想です。

教育における問題点とも一致しているのですが、これはPTAの悩みとも一緒です。同じようにカレンダーをやっても、10人に1人ぐらいは「大変よかった」「非常によくやっています」と言われるのですが、3割もしくは4割の方は「やらされてやっている」と感じ、半数は「やっても変わらない」というような割合になっています。

1割の親の子どもはその後伸びて行きます。他の子どもたちはあまり自覚せず大人になっていく、そのような感じがしています。

子どものスイッチを押した後、後ろから押してやり褒めてあげるような、親を育てることが成功の一番のポイントではないかと思っています。

鈴ヶ森小学校外部評価者 西堀由香さん

マナーキッズの効果はやがて大きな実りに

鈴ヶ森小学校の外部評価者を7期させていただいております。マナーキッズプロジェクトが鈴ヶ森小学校で開催されることは学校から毎月お手紙をいただくことで見ていたのです

が、内容は存じ上げませんでした。その日も普通に仕事をして帰り道のことでした。

鈴ヶ森小学校の近くに桜新道という大きな通り、遠くまで見渡せるところがありますが、そこをいつものように歩いておりましたら、向こうの方から小学生の甲高い声が聞こえてきました。その声が近づいてきてよく見ると、鈴ヶ森小学校の2年生ぐらいの男の子と女の子が周りの人たちに挨拶をしながら帰って行くのです。

周りの人はいきなり小学生に「こんにちは」「さよなら」と挨拶されるものですから、皆さん戸惑って「ああああ…」と言うばかりでした。子どもたちが去った後にその大人の人たちは我に帰り、振り返りながら心温まる感じで微笑を返されているのがすごく印象的でした。

そのような子どもたちの姿が新鮮で嬉しかったものですから、子どもたちに挨拶されたときに「ありがとう、気をつけて帰ってね」という言葉をかけましたら、大きな声で「ありがとうございます」と手を振ってくれました。

そのようなことはそのとき限りでした。しかし子どもたちの柔らかい心の中に蒔かれた種はいずれ何かのときに大きく伸びて、やがて大きな実を实らせてくれるのではないかなと思いました。

カオスの中での正しい判断

山本 浩 法政大学教授 元NHKアナウンサー・解説副委員長

サッカーの新しい戦術的練習方法

私はサッカーの仕事長く続けてきました。最近サッカーの戦術で、「戦術的ピリオダイゼーション」という練習方法があります。お聞きになった方はまだおられないと思います。戦術的ピリオダイゼーションというのは世界のサッカークラブのトップのところやっている練習方法なのです。

どういふものかといいますと、後半の25分になったときに選手が疲れてきています。その疲れた状態で誰か一人交替選手が入ります。その選手はこのような特徴があり、最初からの選手とは違ってこんなことはしない選手、これはできるがこれはしない選手。そうしたときに疲れたディフェンスの選手は、最初からやっていた選手に代わったこの選手に対応して、自分自身のポジションやプレーをどう変えるべきかを想定しながら練習をするのです。

これまでのスポーツというのは要素還元論で、体力、精神力、持久力、スピードなどを部分的に全部教えて行き、自分で統合して何とかしろというやり方でした。世界ではそれを横

に置いておき、ベースではそういうことはしますが、時間の変化と共にどうするかをチェックしていこうとします。

例えばどんなにスピードがあっても、70分やれば落ちてくる、その状況でどうしたらいいか、最善のものを考えていこうというものです。そういう時代になってきています。

カオスが支配する状態

先ほど若月教育長が言われましたが、一つひとつの教科そのものを突き詰めていくことで、一つの完成した個体ができるということではなく、横の連携がどうなっているのか、時間が経過してどう変わっていくのかということを前提とした上で、自分の振る舞いをどうするかを決めていこう、こういうことがスポーツの世界の先端では行われるようになってきました。

根性と自分の意志と教えたことだけではなかなかうまく行かない、世界の中では勝ち上がっていかない、そういった認識があるのだらうと思います。

サッカーの世界ではカオスというのが支配しているといわれます。例えば、渋谷のスクランブル交差点を一斉に千人の人間が青信号になったとたんに動き出す。この千人の人たちがほとんどぶつかることなく交差点を渡り終えます。

ところがある人が2秒ほど、携帯電話が鳴ったために立ち止まったら、他の人間は全部少しづつ行動を変えていかなければなりません。一人ひとりがカオスの中でどうすればいいのかという判断をしていくことにより成り立っているのです。

カオスという状態は世界にたくさんあります。このカオスの中をどうやってやりおうせるかというのが、我われに与えられた課題です。とくにサッカーの世界では、全体あるものは小さな部分にもある、といいます。全体にある傾向は小さな部分にもあり、それはチーム全体に波及するというのです。

小さな穴を塞ぐ

まさにマナーキッズでやろうとしていることは、ごく小さな家庭から始める事なのだらうと思います。小さな家庭ですることが全体に波及していく、つまりいま日本の我われが抱えている大きな穴を塞ぐために、そこそこにある小さな穴を塞ぐことから始めるというのが現実です。日本の社会では、マナーに関してまさにフラクタル（自己相似）が起こっているということだらうと思います。その穴を一つひとつ埋めていく必要性は、家庭にもあるかもしれませんが、家庭だけではなくいろんなところにあるだらうと思います。

【コーディネーター】 永井順國

今日小学生にマナーキッズの指導者として加わっていただいた本学園の中学生の諸君の中から、これまでの5回のトレーニングの経験と本番の経験を通して何を感じたか、何を学び取ったのか、これからどうするかというような感想を少し聞きたいと思います。キャプテンの林さんにそのあたりのことを少し話していただきたいと思います。

八潮学園中学テニス部キャプテン 林さん

礼儀の大切さを自らも再確認

今回は教える立場で小学生にテニスや礼儀を教えました、それと同時に自分で礼儀の大切さを学ぶこともできました。最初は緊張しましたが、小学生のみんなが非常にしっかりしていてよかったと思いました。

マナーキッズのコーチとして出ることができてよかったと思います。

パネリスト 田中日出男

先生、親を尊敬しない日本の青少年

私からの質問させていただきます。つい最近の新聞に筑波大学名誉教授の村上和雄様という方がコラムに書いておられました。世界20カ国の青少年に「先生を尊敬しているか」と質問したら、アメリカとEUは80%以上が尊敬していると回答しましたが、日本は21%しかなく世界で最下位だそうです。19位の国ですら70%が先生を尊敬しているとの回答でした。圧倒的に日本が低いのです。

次に「親を尊敬しているか」との問いに対して、世界の平均は83%、日本はわずか25%にしか過ぎません。このような現状の中で、子どもにマナーを教えることは至難の業です。私はこの数字を見て、本当なのかなという感じがしたのですが、皆さんはどう思われるでしょうか。

パネリスト 和氣正典さん

一つのことが全体を変える

先ほどもお話させていただきましたが、本当にそのような状況があることは事実で憂いており危機感を持っています。しかしその中で、学校の中もそうなのですが、「だからやってもしょうがない」とか「社会が悪いから仕方ない」と、止まってしまう傾向があるように思います。

自分だけがやっても周りがこうではしょうがないと思っている。学校では市民科が教えても、家に帰ると戻ってしまう、だからいくらやってもしょうがないと思ってしまう。

しかし私どもは、だからこそ始められるところからしっかりと始めていかなければならないと考えております。さきほど山本さんが言うておられましたが、一つのところから変えていくことによって、それが波及して全体が変わっていくのだと思います。

世の中を変えようという意識こそ重要

このようなことを真剣に考えていかなければなりません。私どもが市民科を始めたときにはさまざまな非難にさらされました。学者からもずいぶん叩かれました。昔の徳育の復活などと、教育評論家からも言いたい放題に言われました。

それでも私たちがめげませんでした。どこかがしっかりそのことを進めていかない限りは変わりません。明るい未来を築ける子どもを育てていこうとしない限り、決して子どもは育ちません。家庭のせいにしてはいつまでたっても変わりません。

最終的にはもちろん家庭が主体ですが、学校から発信し家庭にも変わってもらうことが大切だと思います。市民科には家庭を巻き込むプログラムをいっぱい作っています。そういう意味でも家庭をしっかりと巻き込んでいきたいと思っています。

簡単になるとは思っていません。一步一步の努力の中で変えていかなければならないというのが私どもの考え方です。

パネリスト 佐藤 勝さん

子どもから挨拶することの重要性

鈴木総師範の話にもありましたが、目上と目下というのは現実としてあります。これまでの日本の教育だけに限らず風潮を見ると、子どもも含めてみな平等だという感覚がありました。

鈴木先生のお話にもありましたが、先生から挨拶はしない、子どもから先に挨拶させるというのがありました。教えてもらう側からまず挨拶をすることは当たり前です。家庭では子どもからまず挨拶させる、必ず「おはようございます」と最後まで言わせることが大切だという鈴木先生のお話がありました。これは本当に大事なことだろうと思います。

中谷さん

「道徳」は心に響かない

道徳という最初のお話がありましたが、少し重いかなと感じました。私の心に響いたのは鈴木先生のおっしゃる「残心」ということでした。

心を残すという日本の礼法には心に響くものがありました。言葉の使い方だと思いますが、

マナーにどういう意味があるのか、私には分かりません。しかしそこに一期一会で人とお会いできることに感謝して心を残すのだという言葉は心に響きました。

コメンテーター 山本 浩さん

残心の本来の意味

剣の世界では残心、残る心と書きますが、柔道の世界では残身、残る身と書きます。小笠原流の先祖をたどると弓と馬に関わる礼法です。もともとは戦（いくさ）のときの重要なテーマだったのです。

日本の剣術の世界で昭和16年ぐらいに亡くなった野間ひさしさんという方がおられました。この方は講談社の野間さんの先祖にあたる方です。剣道の名人と言われ35歳ぐらいで亡くなりました。この方が「残心」について非常に詳しく述べておられます。

残心は何かといいますと、油断をしないということが本来の意味なのです。昔合戦の最中に、刀を振って相手の鎧の間から脇差で相手のわき腹を突く、死んだと思ってその脇差を抜いて振り返った瞬間、突いたはずの相手から袈裟懸けに切られて死ぬ侍が多かったのです。

つまり相手の片腕を落としたがゆえに、俺は勝ったと思い安心し油断してしまって刀を鞘に納め、振り向いたとたん後ろから突かれて倒れる武士が多かったのです。こういうことがあってはならないというのが、残心のもともとの意味なのです。油断をしないということです。

剣道の世界でも残心は、今はその形、余韻を大事にしますが、本来は一本を決めた後にも、相手を見据えながらさがるのです。倒したはずの相手からやられることのないようにするためです。

残心を大事にする侍は相手を切った後にも、相手を必ず見ながら下がる、ということをしていたのです。その残心が、時代が変わって違った意味にとらえられています。ただ油断をしないということはマナーキッズでいう挨拶ということと非常に似て共通した面があります。

挨拶の重要な役割

私は車を運転しますが、眠くなると大きな声で歌を歌います。そうすると不思議に眠気がとれます。どんな菓や飴をしゃぶるよりも効き目があります。でっかい声でカラオケでも歌うと睡魔が吹っ飛んでしまいます。つまりしゃべるといことは覚醒させる作用があります。

しゃべることによって覚醒ししゃきつとなります。とかく今の時代は弛緩の時代、緩んでいる時

代だと思えます。ちゃんとさせる意味で言葉をかける、その後に残心というものがあるのだと思えます。言葉をかけて相手の様子を見ながら、自分のところに戻る。挨拶をするということは自分自身をコントロールする、非常に重要な役割なのです。

2階から降りてきたときに、パジャマから普段着に着替える。あるいは畳の部屋で挨拶して、畳の中に入ったとたんに戦闘モードに変わる、こういう役割があります。言葉をかけるということ自体に自分の緊張感を一度締める、緩みを締める役割があるのではないかと思います。

パネリスト 和氣 正典さん

押し付けではなく学ぶ機会を与える

子どもが主体ではないかというお話ですが、もちろん子どもが主体なのです。昔はたくさんの人に囲まれてコミュニケーションの機会がたくさんありました。その中でいろんなことを学ぶことができました。しかし今はそういう機会は非常に減ってしまいました。

子どもが自分が何かをするための材料を十分に与えられていないという現状があります。それを学校でしっかりと与えると同時に、考えるためのいろんな手法を含めてしっかり子どもたちに与え、子ども自身が考えていく力をしっかり身につけさせたいと思います。何か特定のことを子どもたちに刷り込むということでは全くありません。そこは結構誤解されるところです。

子どもは指導すべきことは指導するというと、すぐに何かを刷り込むと思われがちですが、そうではなく子どもに対してきちんと正対をして、しっかりと自分たちの考え方や価値観をぶつけることにより、子どもたちがそれを見ながら自分の価値観をしっかりと身につける、その契機を与えて行きたいと思っています。そういう意味での環境です。

市民科の授業は大変難しいと思えます。先生方はそういう意味での環境づくりをしたり子どもにそういう契機を与えたりすることを、大変苦勞して実践しているところです。そのためにも教科書を作りました。

第二延山小学校 宮下校長先生

なぜ学校でマナーを教えられないか

私も一つそうだなと思ったことがあります。いつも学期始めと学期終わりに子どもたちの担任の先生方に、「ありがとうございます。お世話になりました」と挨拶をさせるのですが、その時にお辞儀をしながら挨拶しているのです。言葉を言った後にきちんと礼をさせるべき

だなどと思いました。これは本当にいいことを教えていただいたなと感謝しています。

マナーキッズフォーラムでNPOのいろんな方がいい実践を成されているのは素晴らしいなと思うと同時に、本区の市民科の目指すところと同じ部分が多いなと感じております。そう思いながら聞いておりました。

ただ一つ私が思いましたことは、マナーキッズフォーラムやマナーキッズ教室でやるようなことが、なぜ学校でできないのかということです。NPOのお力をお借りすることも大事ですが、日常の210日ほど子どもが登校する、朝から晩までの学校の中で、なぜマナーをきちんと教えられないのか、それを非常に残念に思います。

なぜ尊敬されないか

本校の場合、形から入るということではいろんなご意見もあると思います。当校は躰教育を最も重視している学校で、「時を守る、礼を正す、場を清める」が躰教育の基本になっています。先ほど子どもたちは親や教師を尊敬しないという話がありましたが、「尊敬するということはどういうことか」ということを教えなければ、尊敬するという概念と結びつかないのです。

教師に対する言葉づかい、PTA役員としていらっしゃる大人に対する言葉づかい、そういうときの言葉づかいを子どもたちにきちんと教えることが重要だと思います。

時を守るといっても、登校時間はこの時間に来る、でも教室で座っていなければならないためにはこの時間ぎりぎりに来ては間に合わない、そういう細かいところまで実際の学校生活を通じて教えることにより、それが親や教師を尊敬する態度の結びついていくのではないかなと思います。

尊敬するとはどういうことか

もちろん教師や親がいい加減な生活をしていたら、形だけを子どもたちに教えても尊敬という形にはなりません。どういうことが尊敬する態度であり気持ちであり概念なのだというのを、きちんと日本の学校は自信を持って子どもに教えるべきだと思います。

その部分がなおざりにされては、いくら道徳を教えても身につきません。具体的にはどういうことが相手を尊敬することであり、自分がマナーを守ることであるのかということ教えるのが品川区の市民科なのです。これは決して強制ではなく他律による自律なのです。品川区の学校はそういうことを目指しておりますので、そのことを一言言わせていただければと思います。

伊豆の国市 浅井さん

人は必ず変わる、まず行動から

とにかくマナーキッズテニスをやっごらんになることです。子どもはとにかく変わります。現在は80人の子どもたちに教えていますが、5年間で止めた子どもは10人です。しかし入りたいという希望者も多く、人数の関係で80人に絞っております。

親御さんも驚くほど変わります。黙って座っているのなら、行動することです。子どもも大人も本当に変わります。私がこの実験を始めて5年9ヶ月になります。指導している自分も変わります。

見るだけではなくまずやってみてください。ダメだったら変えればいいのです。マナーキッズはテニスだけではありません。スポーツ全体、文化全体でやってみてください。これほどいいことはないと思います。自分がやってみて心から思っていることです。

ただ私が現在壁にぶつかっていることは、いかに行政を動かすかにあります。いかに教育委員会を動かすかです。中学校では初めて硬式テニス部に私たちが教えています。マナーキッズの中学生に教えています。何度でも申しますが、とにかくやってみる事です。

七大学テニス部OB会 山下さん

一隅を照らすボランティア活動

私も5、6箇所ですがボランティアで小学校でやらせていただきました。終わった後に一人ひとりと握手して、どうだったかを必ず聞くようにしています。今日もそうでしたが、どこでも子どもたちははつらつとしています。

やっている途中で子どもたちを褒めるようにしています。そうするとみんな喜んでやっているなということをつくづく感じます。

和氣さんが、いいと思ったことは自分の周りからやるのだと言われましたが、全くその通りだと思います。私はサラリーマン生活を終えて年金生活に入っています。比叡山延暦寺根本中道の一番高いところに「一隅を照らす」という言葉が書かれています。いいと思ったことは片隅からでもやるのだと、できるところから一つひとつやっていくことがいいのではないかと思います。そういうことでボランティアを、張り合いを持ってやっています。

新潟ジャンボインドアテニススクール 長沢さん

大人も正しいマナーを

このマナーキッズを新潟でももっと広めたいと思っています。地元新潟市の教育委員会、

県と市の体育協会、テニス協会、NSBという地元の放送局、新潟日報などに出向き、マナーキッズ教室をやるので後援をしていただきたいとお願いし、全てから後援していただくことになりました。

今回はスクールだけでの実施ですが、今後は小学校単位、地域などに広がることを願っています。一過性で終らせたくないでいろんな形を考え、今までと違うようなやり方で保護者を巻き込んででもサークルのようなものができればいいなと考えています。

先ほど鈴木先生のお話がありましたが、意外に正しいマナーについて私たち大人もあやふやな認識です。いいことはきちんと学ぶことが大切だと思います。正しく理解できると自信を持って周りに伝えたくなくなるのではないかと思います。受講した子どもたちも周りの友だちの伝えたくなくなるのではないかと思います。

コメンテーター 田中日出男

マナーキッズは種まき

子どもは教えれば必ず変わると確信しています。まだまだ、礼儀正しさのDNAは残っている、しかし、今がラストチャンスだと思います。だんだんと「今はおかしい」と思う人が減ってくるのです。今のうちに何とかしなければなりません。

教育界は、若月教育長が言われたようになかなか大変な世界と思います。閉鎖的、前例踏襲、個人商店、いい事を真似をしないという体質があり、「導入の壁」、「フォローの壁」が立ちほだかっていると痛感しております。それを破るのは簡単ではありません。ロータリークラブや青年会議所、商店街などのご支援も必要です。

先程、何故、学校で教えられないのかのご指摘がありましたが、まさに、鈴木総師範の教え方、やり方を学校の先生が身につけて欲しいと思います。そのためには学校マネジメントをどうしたらいいかを考える必要があります。是非、その面でも品川区も挑戦を期待します。

我々の活動は、“太平洋のゴミ拾い”といわれていますが、“琵琶湖のゴミ拾い”になるためには、もっとマナーに対する「国民的関心」を呼び起こすことも欠かせません。そのためにも、マナーキッズが、全スポーツ、文化活動に行き渡る必要があります。

ここ百数十年の間に3回、日本の伝統的な良さを否定した「つけ」がまさに来ているわけで、並大抵ではありませんが、スポーツ、文化などいろんなところで種を蒔き、マナーに対して関心を持つ。

マナーキッズを通じて子どもが変わる、指導者のシニア、学生も変わる、保護者、先生も逐

次変わる、コミュニティも変わる、時間はかかりますが、実行すれば、人は必ず変わると確信しております。

コメンテーター 和氣正典さん

信頼される学校、教師の復活を目指して

品川区の市民科に対して注目していただければありがたいと思います。市民科の教科書は市販しています。一般で購入することができます。現在は改訂作業を進めているところですが、いろんなご意見をいただきたいと思っています。教員たちを中心に作ってきましたので、まだまだ至らない点多々あるかと思いますが、ぜひご意見を賜りたいと思っています。そうすることでさらに充実した市民科になるものと思います。

品川区はいろんなことをやっています。先生方には大変頑張っていただいております。子どもが本当に目指しているのは、もう一度信頼される学校、信頼される教員になることです。残念ながら公教育に対する信用信頼が低下し、先生に対する尊敬が低下している中で、やるべきことをきちんとやれる学校教育を実現したいと思ってやっているところです。ぜひご支援をいただきたいと思います。

総括コメント

コメンテーター 山本 浩さん

兵の作り方、アスリートの作り方

スポーツの世界で最近私がよく言うのは、スポーツには「兵を作る作り方」と「アスリートを作る作り方」の二つがあるということです。ある時は必ず兵を作る作り方が必要になるときがあります。命令一下、号令一下のもとに一つのことを、同じように決められた約束に従って動くということです。

兵の原則には面白いものがあります。命令には絶対に服従する、命令に対して質問をしない、命令の結果に対して責任を負わない、というものです。

兵である瞬間は私たちの生活の中にもどこかにあると思います。とくに子どもに自我が出てくる頃にかけて、その兵なるトレーニングをスポーツ界ではよくやります。これがやがてアスリートのトレーニングに変わっていかねばなりません。

コミュニケーションのエネルギー

アスリートのトレーニングには、自分で判断できる、自分で責任を負える、コミュニケーションを使えるという三つの要素が必要です。マナーはコミュニケーションと行動規範を複

雑に混ぜたものです。

行動規範だけをベースにしたのは祭りの中でよく経験します。祭りには代々受け継がれた行動規範があります。これはやってはならない、なぜなら罰が当たるから、神様が許さないから、というものです。その中で我われはコントロールされてきました。

今の時代は神様を持たない時代です。コミュニケーションでもって行動規範に対する説明を求められてしまいます。コミュニケーションは大変大きなエネルギーを必要とします。コミュニケーションのエネルギーとは、自分が面と向かって話す相手の人間関係、この距離かける人数かける相手のパワー、この三つを掛けたものを単位時間で割ったものがコミュニケーションのエネルギーになります。

$$\boxed{\text{エネルギー}} = \boxed{\text{人間関係の距離}} \times \boxed{\text{人数}} \times \boxed{\text{相手のパワー}} \div \boxed{\text{単位時間}}$$

今の時代はとくにコミュニケーションのエネルギーは大きく感じられます。とくに長時間になりいろんな人が入ってきますから、距離の遠い人とやらなければならなくなります。複雑な状況がたくさんわれわれの身の回りにあると思います。神がない、コミュニケーションが必要以上に多くなってきます。しかもトレーニングの機会は少なくなっています。自動販売機は何も答えてくれません。

先日、新潟である雑貨屋に行きましたら、店番のおばちゃんが「今日は冷たい風が吹いているね」と、全く知らない私に対して言うのです。そのような会話をする自動販売機などはありません。

コミュニケーションは全く知らない第三者に対して接触を図るときにも、パワーを持って取り組むものなのだと思います。そうした機会が現在は失われています。その状況の中でわれわれマナーキッズはこれから何をすべきかが課題です。

もう一度原点に立ち返って考えよう

NHKのアナウンサーはみんな同じような喋りするという批判があります。「NHKは誰がしゃべっても同じだよな」「金太郎飴だ」とよく言われます。それはなぜかと言うと、経験のない者が経験のある者の横について、スコアをつけたりします。「門前の小僧、習わぬ経を読み」ということになるのです。

これをマナーの世界に転換してみますと、大人がやっていないから子どもがやらないかもしれない、という思いに私たちはもう一度立ち返る必要があります。そのような気持ちでおります。

【コーディネーター】 永井順國

今の子どもたちに足りないもの

一つ目は、コミュニケーションに加えて最近の子ども若者を含めて、経験不足ということがしきりに言われます。しかしただ単に経験すればいいというものでもないと思います。今子どもたちの世界で足りないのは鍛錬とか訓練とか反復だと思います。

繰り返すことによって習慣化し、習慣化することによってそれが生活スタイルになり、そのスタイルから修養型教養が生まれ、そして最後は文化となっていくものだと思います。そういったことがマナーキッズのプログラムには込められてと理解しています。

新しい公共の概念

二つ目は「新しい公共」ということです。最近、この「新しい公共」という言葉をしきりに耳にします。民主党政権が今年、「新しい公共円卓会議」を開き、今後、NPO支援を含めて展開していくのだと言っています。しかし新しい公共という概念は何も民主党の専売特許でもありません。1980年代の後半から、つまり20年以上前に、民間ボランティアグループが、「もう一つの公共」あるいは「新しい公共」という言い方で発信し始めたものです。

かつて「公共」「公益」は「官」の独占物でした。けれども、それは違うのではないのでしょうか。民の方にも担うべきものがあるのではないか、「官」と「民」の間には、厳然として「公」（パブリック）という概念があります。このパブリックの中に、官は官で法律的に責任を持ちつつ、民の方も主体的に参画していき、社会課題の解決に力を発揮していくという概念です。

シニアとジュニアが共に指導者

今日とても面白い場面を見ました。マナーキッズテニスのプレゼンテーションの中で、アクティブシニアの60代から70代のボランティアの方がたと、ジュニアの14歳・15歳の子どもたちが、同じ指導者の立場で本日のプログラムであるマナーキッズ教室を展開していたのです。めったに見られない風景です。両者が同じテーマで同じことをする、このような光景、今の日本にはほとんどありません。

このようなことがどんどん増えていけば、だんだん活力のある、いい社会になってくるものと思います。そのような感想を持ちました。

<総合司会> 宮司正毅

体験学的重要性

マナーキッズ大使の一山君のご紹介をいたしました。この4年間で24名のマナーキッズ大使が出ております。5つの項目、いわゆる戦績、マナー、感想文、体力、テスト・面接をクリアして選ばれた子どもたちです。毎年500名ほどの中から4人から6人が選ばれます。

選ばれたマナーキッズ大使はウインブルドン大会へ約1週間派遣されますが、そこから帰ってくると、一段と成長するのです。信じられないくらい成長します。要するに体験することがいかに力になるかということです。先ほどからいろいろとお話が出ましたが、とくに若月先生のお話の中で、事実を変え事実ののっとなって現実の世界をしっかりと見る体験をするということは、ものすごく重要です。

欧米では体験学が非常に発達しています。日本では体験学という学科がある大学は極めて少ないです。この体験学という学をもっと日本は伸ばさないと、いま皆さんが抱えている問題はなかなか追いつかないのではないかと思います。

マナーキッズに対する異なる理解

先ほど先生から、なぜ小学校でそれができないのかとのご質問がありました。私は北海道に住んでおりますが、北海道でマナーキッズを進めようと思い、いろんな先生方とお話しました。その反応は品川区とは全く違いました。もともと日教組が強いところだからかとも思いますが、反応が全く違います。現在も話し合いは続けていますが、ひょっとすると品川区のお力をお借りせねばならぬ事態があるかもしれません、その節はよろしくお願いします。

マナーキッズ大使のその後の活躍

今まで20人のマナーキッズ大使がウインブルドンに参りました。第1回目に行かれた久良知美帆さんは、その後フェンシング協会に引き抜かれ、フェンシングの将来のオリンピック選手候補として励んでおられます。先日は新人戦で優勝し、ロンドンでのオリンピックを目指しています。テニスでの派遣でしたが、それだけ広がりを見せています。

また吉岡晃子さんは、全国中学テニス大会で本選にも出場し、学業優秀、文武両道で都知事賞を受けました。百人一首でも全国大会で第2位に輝きました。また水泳バタフライでジュニアオリンピック候補になっています小島日佳里さん、テニス、バトンでも活躍中です。

ピアノコンクールで西日本地区優秀賞を獲得した河原健太君、全日本テニスジュニア本戦出場の華谷和生さんや古田伊露君、全国読書感想文で文部科学大臣賞、仙台マラソン高学年の部優勝の高橋綾香とマナーキッズ大使経験者から優秀な人が続々と出ています。

私は彼らをウインブルドンに連れて行った効果だけとは申しませんが、このマナーキッズ

で学びその精神を心に秘めて、体験を通じこのように飛躍的に成長している一環をご紹介します。
させていただきました。